

平成30年度北九州市立美術館運営評価シート

評価項目1: 作品～資料収集・環境管理・保存～

計画		実施		検証		今後の対策
5カ年計画	評価指標	平成30年度の取組み	実績	自己評価	課題等	
開館以来の収集方針や所蔵内容を踏襲しながら、持続可能な収集活動を目指す。収集対象は、下記分野に重点を置く。 ○現代の多様性を示す優れた作品 ○地域の美術史を構築する上で欠かせない作品 ○近現代美術史の展開をたどる既存コレクションの充実・補完	○美術作品の収集内容	①既存コレクションを充実・補完するための作品・関連資料を収集する。	・購入については、石川直樹の写真1件(2点組)、東島毅の絵画1点、計2件を収集した。ともに企画展に合わせ出品された作品である。 ・寄贈については、購入と同じく企画展出品作品の石川直樹の写真2件(11点組、5点組)のほか、入江比呂(2点)、佐藤文玄(1点)、中村ミナト(1点)の作品計6件を収集した。	A	・写真、油彩、彫刻、日本画など多彩な分野の作品を、企画展関連作家、本市ゆかりの作家など多角的な関連により、バランスよく作品を収集することができた。 ・遺族から寄託を受けることにより、長年調査してきた青柳喜兵衛の作品を充実させることができた。それらは、すでに所蔵している同系作品とも関連が深く、資料価値も高い。また、作家遺族との交流を深め継続する点でも意義がある。	・収集方針に基づき、持続可能な収集活動を目指す。 ・限られた収集予算のなかで優れた作品を厳選する。 ・寄贈作品の受入れについては、基準を厳密化していく。
		②平成30年度の自主企画展にあわせて、青柳喜兵衛に関連する作品・関連資料を収集する。	・秋に開催された自主企画展「没後80年 青柳喜兵衛とその時代」に関連して、作家遺族から新たに青柳喜兵衛の日本画3点の寄託を受けた。			
所蔵作品・資料の管理に必要な保管環境を整備し、必要に応じて作品修復を行う。	○修復作品の内容・選定理由	①青柳喜兵衛の作品など、緊急性の高い作品から順次修復を行う。	・当該年度の青柳喜兵衛展に向けた修復ではなく、翌年度春に予定していたコレクション展の特集「没後30年 寺田政明」に向けて、出品予定作品4点を修復した。	A	・企画展やコレクション展など複数の展覧会に向けて作品状態を調査していたところ、青柳喜兵衛の作品よりも寺田政明の作品の方が修復の緊急性が高いと判断したため、修復対象作品を変更した。該当作品は修復を無事に終え、展覧会で公開された。 ・リニューアルを機に、点検を兼ねて収蔵庫の清掃回数を増やし、環境保全に取り組んだ。	・次年度以降の出品予定、貸出予定を想定し、修復を計画的に進める。 ・引き続き日常的に収蔵庫内の点検・清掃を行い、作品と保管環境の安全を確認する。
	○収蔵庫の環境整備状況	②日常的に収蔵庫内の点検・清掃を行い、作品と保管環境の安全を確認する。	・月に2～3回、収蔵庫の清掃作業および保管環境の安全確認を行うことができた。 ・収蔵庫の温湿度測定について、室壁にある機械測定のみだったが、各室に個別の温湿度計を設置し、ダブルチェックできるようになった。			
当館所蔵の作品及び図書データベースを整備し、開館50周年となる2024年の一般公開を目指す。	○データベースの整備と公開に向けた取組みの状況	①作品データベースの資料作成、精査を行う。	・改修工事にあたり、作品の保管場所が変わったため、新しい位置データを作成し、データベースを更新した。 ・コレクション展および他館に貸出した作品の出品歴を入力できるようにし、平成30年度分からのデータの入力を行った。	C	・ミスなく継続的にデータベースを作成するには、マンパワーが足りていない。 ・作品データベースについては、運用を開始して間もないため、入力項目の変更や追加などソフト自体の手直しが必要である。 ・図書データベースについては、年間目標は達成できたものの、未入力のまま現在に至る過去の図録の入力作業を引き続き行う必要がある。	・入力作業など時間を要する作業に十分な手当てが必要である。 ・より積極的に作業の効率化を図る必要がある。
		②図書データベースの資料作成、精査を行う。	・図書データベースの整備にあたり、展覧会のジャンルごとに配架していた図録を、開催年度順に配架しなおし、重複分を間引きした。 ・データ化されていない過去の図録の入力作業を一部行った。			
				総合評価		
				B		

(評価) A:大変良い B:概ね良い C:やや悪い D:大変悪い

平成30年度北九州市立美術館運営評価シート

評価項目2: 公開～調査研究・展覧会～

計画		実施		検証		今後の対策		
5カ年計画	評価指標	平成30年度の取組み	実績	自己評価	課題等			
企画展やguest roomを通じ、新収蔵や研究発表を見据えた新鋭作家の調査を行う。	○作家についての調査内容	①guest room第3回展、石川直樹展を開催する。	・目標とした2つの企画展「guest room003 東島毅-Dual」「石川直樹 この星の光の地図を写す」では、作家との対面調査も十分に行い、個性ある展覧会を実現した。 ・次年度以降の企画や収集についても計画的に調査を進めた。展覧会開催の調査(15件)、作品・資料等の収集の調査(1件)、所蔵作家・作品の調査(4件)、教育普及の調査(1件)を実施した。	<table border="1"> <tr><td>評価</td></tr> <tr><td>A</td></tr> </table>	評価	A	・展覧会を実現するだけでなく、作家との信頼関係を築けたことが、東島毅、石川直樹の作品収集につながった。 ・当該年度の企画展、コレクション展に限らず、多様な作家調査が実現できた。	・企画展調査は数年越しの長期に及ぶため、計画性をもつてのぞむ必要がある。
				評価				
A								
・目標の展覧会のほか、次年度以降の作家調査も実現できた。								
所蔵作家に関する対面調査、資料収集を蓄積し、研究論文、口頭発表等を行う。	○研究成果の件数・内容	①森山安英、青柳喜兵衛の自主企画展にあたり、論文公開や口頭発表を行う。	・論文等発表件数 9件 ・口頭発表件数 10件 ・自主企画展の図録に論文等を発表したほか、共同企画展の図録や外部施設での展覧会に論文を掲載するなど、幅広い媒体で研究成果を発表することができた。 ・「森山安英 解体と再生」展図録を対象に、小松健一郎学芸員が「美連協大賞「優秀論文賞」」を受賞した。	<table border="1"> <tr><td>評価</td></tr> <tr><td>A</td></tr> </table>	評価	A	・「森山安英 解体と再生」展論文が全国的に高い評価を得た。 ・各学芸員が幅広く研究発表を行ない、図録だけでも年内6つの展覧会で論文等を執筆し、発表の場や機会を大幅に広げた。	・継続して、所蔵作家や展覧会に向けた調査研究を進め、積極的に成果を発表していく。
				評価				
A								
・件数、内容ともに例年以上の成果を上げることができた。								
調査研究に基づいたテーマ性の豊かなコレクション展や自主企画展を開催する。	○企画の内容	①テーマの異なる3つのコレクション展を開催する。	・「色と形にみる音のはじまり」「アメリカで活躍したアーティストたち1960's-80's」の特集では、ミュージアムツアーへの対応を考慮した内容も加味した。 ・「浮世絵」の特集では、大幅に解説を加え、歴史や表現の変遷の紹介に努めた。	<table border="1"> <tr><td>評価</td></tr> <tr><td>A</td></tr> </table>	評価	A	・コレクション展では、小学生を対象としたミュージアムツアーを想定しながら、一般にも見応えのある内容を目指した。また幅広いジャンルを紹介するように心がけた。 ・2つの自主企画展では、現代絵画と近代絵画という、異なる時代の画家に焦点を当て、それぞれ過去最大の回顧展を開催することができた。	・継続して調査研究を続け、テーマ性の豊かなコレクション展や自主企画展を開催する。
		評価						
A								
②森山安英、青柳喜兵衛を紹介する自主企画展を開催する。	・単館の自主企画展として、予定通り「森山安英 解体と再生」展、「没後80年 青柳喜兵衛とその時代」展を開催した。 ・自主企画展を年間で2本開催し、それぞれ特色ある内容を紹介することができた(以前は年間1本程度)。	・件数、内容ともに例年以上の成果を上げることができた。						
他館、他機関と協同し、連携企画展や共同調査を行う。	○連携の件数・内容	①ムナーリ展、1968年展、ルオ一展において、他館等との連携企画を開催する。	・他館等と連携した3つの共同企画展(「ブルーノ・ムナーリ」、「1968年 激動の時代の芸術」、「ジョルジュ・ルオ一」)を開催することができた。 ・「1968年 激動の時代の芸術」展が、全国の美術館で開催された企画展を対象に贈られる最高賞「美連協大賞「大賞」」を受賞した。	<table border="1"> <tr><td>評価</td></tr> <tr><td>A</td></tr> </table>	評価	A	・「1968年 激動の時代の芸術」展が、企画展の最高賞を受賞し、全国的に高い評価を得た。 ・他館との共同企画展3本では、いずれも当館が企画に深く関わる立場として活躍した。	・共同企画展の場合、巡回としての立ち上がり時期と当館での開催時期が異なる場合が多いため、業務の繁忙期を見極め、スケジュール調整していく。
				評価				
A								
・件数、内容ともに例年以上の成果を上げることができた。								
				総合評価				
				A				

(評価) A:大変良い B:概ね良い C:やや悪い D:大変悪い

平成30年度北九州市立美術館運営評価シート

評価項目3: 交流～教育普及・地域交流～

計画		実施		検証		今後の対策
5カ年計画	評価指標	平成30年度の取組み	実績	自己評価	課題等	
教育現場や教育委員会と連携し、小中学生等が美術に触れ、楽しむ機会を広げる事業を実施する。	○参加校の満足度	①市内の全市立小学校3年生を対象に「ミュージアムツアー」を実施し、対話型鑑賞を実践する。	<ul style="list-style-type: none"> ミュージアムツアー参加校 129校/130校(1校台風の為中止) 参加者数 児童 7,730人 引率者 437人 合計 8,167人 	自己評価 評価 B	②鑑賞教室や館内授業については、学校からの申請に基づき支援するものであるため、学校へのアンケートのみでなく、参加者(生徒)へのインタビュー等を実施し、満足度を調査する必要がある。	ミュージアムツアーについては、アンケート結果に基づき、午後の開始時間の見直し、学校説明会の中止等を行った。鑑賞教室・館内授業については、アンケート、インタビュー等を実施し評価指標としての満足度を調査し、事業運営に反映する。
		②学校が行う鑑賞教室や館内授業について支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞教室参加校 4校 参加者数 575人 館内授業参加校 16校 参加者数 674人 アンケート 未実施 			
子どもから大人まで幅広い年齢層を対象にしたワークショップ、講演会、ギャラリートーク等を実施する。また、複数年にわたり継続した市民参加型のアートプロジェクトを実施する。	○参加者の満足度	①ムナーリ展と連動したワークショップを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 「ブルーノ・ムナーリ展」でムナーリの考案した子どもから大人までが参加できるワークショップを行う予定であったが、遺族の意向により中止を余儀なくされたため、同展関連イベントとして、「遊具で遊ぼう」を2回行った。 その他の展覧会でも様々なワークショップを行った。 	自己評価 評価 B	「世界ネコ歩き展」の岩合光昭氏のギャラリートークでは750人、「森山安英展」の映画+トークでは200人と多くの方が来場するなど、話題性の高いイベントを開催した。反響も大きく、充分な手ごたえがあったものの、客観的に参加者の満足度を知るための有効な手段を見いだせなかった。	・5カ年計画の目標に基づき、多種多様な教育普及事業を展開して、多くの参加者を得たが、評価指標となる「参加者の満足度」について、十分な聞き取りができなかった。
		②各展覧会で講演会やギャラリートークを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 多くの講演会やギャラリートークを通じて、作品理解の場を提供し、来館者との交流を図ることができた。 講演会 7回 参加者729人 (内、外部講師5回、当館館長1回、当館学芸員1回) ギャラリートーク 32回 1,740人(※昨年度の倍以上) (内、外部講師6回、当館学芸員26回) 			
		③長期ワークショップ「ぬいかけの植物園計画室」を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> 毎年恒例となった「ぬいかけの植物園計画室」では、リピーターも増えた。 トークイベント 参加者14人 ワークショップ 4日間 参加者103人 ワークショップ展示 来場者1,005人 ※新たに北九州文学サロンを会場とした。 			
現代の社会状況に対応した、独自の自立型のボランティア制度を構築する。	○ボランティア制度の運営状況	①新たな体制でボランティアを募集し、養成講座を実施してボランティア活動を再開する。	<ul style="list-style-type: none"> リニューアル後、初めて新規にメンバーを募集し、3ヶ月間の事前研修を実施した。 研修を受講後、42名が登録し、鑑賞サポート班、プロジェクト班、美術情報班の3つのグループに別れ、新たな体制での活動が始まった。 ボランティア組織の名称を「めるく」とした。 	自己評価 評価 A	・募集にあたり、主な活動日を週末に設定したほか、各自の生活スタイルに合わせて参加できるよう、制度の見直しを図った。	・ボランティアの募集と研修を終え、いよいよ活動が本格化するため、メンバーの自主性を育む取り組みを行う。
他館、他機関との連携を促進し、同時に連携の内容を工夫する。	○参加者の満足度	①北九州芸術劇場と連携して、分館で開催する石川直樹展に関連したダンス公演や本館エントランスホールにおいて演劇公演を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 石川直樹展関連企画として「ベートーヴェン交響曲第5番「運命」全楽章を踊る」を開催。入場者数 237人 公演内容に対する満足度 70% 本館エントランスホールにて「ドン・キホーテ」を開催。入場者数 195人 公演内容に対する満足度 データなしだが好意的な意見 西山まりえ[チェンバロ(クラヴザン)]アート・ミュージアムコンサートを開催。入場者数 70人 公演内容に対する満足度 80% 	自己評価 評価 A	イベント自体は当館主催ではなく、アンケートも主催者が取っているものであるため、当館への直接的な評価にはなじまない場合がある。	アンケート結果を主催者と共有し、今後の企画に活かしていくとともに、当館としての積極的な関わりを模索していく必要がある。
				総合評価		
				B		

(評価) A:大変良い B:概ね良い C:やや悪い D:大変悪い

平成30年度北九州市立美術館運営評価シート

評価項目4: 広報～利用促進のための情報発信～

計 画		実 施		検 証		今後の対策
5カ年計画	評価指標	平成30年度の取組み	実 績	自己評価 評価	課題等	
展覧会等の傾向や予想される観客層などを分析し、SNS等も活用した効果的な広報活動を行う。 また、外国人向けの広報も充実させる。	○広報の内容、件数 ○入館者数 ○アンケートの方法	①アンケート方法の見直しを行う。(回収方法等)	アンケートについては、効果的な方法を実施するため、いくつかの案を出し検討を行ったものの、館内の体制も含め、準備に時間を要したことから、未実施となった。	フェイスブックの活用や英語版HPの開設など広報活動に一定の成果はあったが、バスツアー等の団体客誘致には至らなかった。アンケートの見直しは、未実施。	アンケート内容の見直しについては、アンケート結果を美術館運営にどのように活用するのかが課題である。	アンケートについては、事務、学芸を交えたプロジェクトチームをつくり、アンケート内容、収集場所等を検討し、実施する。 また、地元に着したコミュニティFM、フリーペーパーを活用した広報を積極的に実施する。
		②各企画展において、ツイッターやフェイスブックを開設する。	ツイッターを開設した企画展 ・再興第102回院展 入館者数 6,270人 ・ブルーノ・ムナリー 入館者数 6,370人 ・岩合光昭の世界ネコ歩き 26,951人 ・ジョルジュ・ルオー 17,119人			
		③旅行会社等への積極的なPR活動に努める。	・地元大手旅行社に対し美術館レストランでのランチをセットにしたバスツアーの提案を行った。 ・コミュニティFMの番組に積極的に出演し、PRを実施した。 ・団体利用実績のあるカルチャーセンターをポスターチラシ発送リストに追加し、展覧会ごとにPRを実施した。			
		④英語版HPを作成する。	北九州市東田地区ミュージアムパークのHP内で美術館の英語版HPを開設した。			
来館促進のための連携先の確保と、連携の内容を工夫する。 また、美術館友の会の活用を図る。	○連携の件数・内容	①他館と連携した割引特典等の企画を実施する。	ジョルジュ・ルオー展と北九州音楽祭(チェンバロコンサート)との共通チケットを発行した。(1件)	共通チケットの発売により、集客について相乗効果があったと考えられる。	友の会会員へのアンケート調査等を通じてニーズの把握に努め、魅力ある展覧会やワークショップ等を開催する。そのことにより、会員増加を図る。また、友の会会員へのアンケートを実施し、美術館に対するニーズを把握することにより、会員増、来館者増につながる効果的な連携を検討する必要がある。	今年度も、積極的に他館との連携を進め、集客対策としたい。友の会については、引き続き会報を通じて展覧会の魅力を伝えることにより、来館促進を図る。また、友の会会員へのアンケートを実施し、美術館に対するニーズを把握することにより、会員増、来館者増につながる効果的な連携を検討する必要がある。
		②美術館友の会会報誌による展覧会情報等の発信に努める。	美術館友の会会報誌を4回/年発行し、展覧会情報の発信を行った。			

(評価) A:大変良い B:概ね良い C:やや悪い D:大変悪い

総合評価
B

平成30年度北九州市立美術館運営評価シート

評価項目5：環境～快適なアメニティ空間の演出～

計 画		実 施		検 証		今後の対策
5カ年計画	評価指標	平成30年度の取組み	実 績	自己評価	課題等	
美術館内外の環境について、館の安全確保と適正管理に努める。 また、ホスピタリティマインドの向上に努め、市民に開かれた美術館を目指す。 加えて、老朽化が進んでいるアネックス棟の整備計画の検討を行う。	○実施状況 ○入館者数	①警備、清掃、受付・監視、設備等の現場会議を行う。	平成30年10月、警備、清掃、受付・監視、設備委託事業者と現場会議を実施、来館者への対応、施設の不備状況の再確認、不審車両への対応等について協議した。 平成30年度総入館者数 198,164人 平成29年度総入館者数 183,887人	自己評価 評価 A 委託業者との現場会議を実施し、要望に基づき、連絡箱の設置や電気工事等を実施した。また、アネックス防水他各種工事を実施するなど、目標通り達成できた。	アネックス棟については空調設備、防水、水道関係などまだ不備があることから、引き続き計画的に改修を実施していく必要がある。	・今年度も、委託業者との意見交換会を行い、施設や運営の改善に活かしていく。 ・施設の不備、修繕工事について予算要求するとともに、緊急性等考慮し、可能なところから順次工事を進めていく。 ・お客様のニーズの把握に努め、商品開発等ミュージアムショップの一層の充実を図る。
		②アネックス棟の防水工事や設備等の不具合について、修繕計画を立て実施する。	アネックス棟の防水工事、中央階段下踊り場シート防水補修工事等、施設の不具合箇所について、優先順位に従い修繕工事を実施した。 主な修繕工事件数 8件 1,828万円			
		③美術館友の会と連携してミュージアムショップの充実に努める。	美術館友の会と連携し、オリジナルグッズの制作、新規商品の取り扱いを行い、ミュージアムショップの充実を図った。 オリジナルグッズの制作 2件 新規商品の取り扱い 5件			

(評価) A：大変良い B：概ね良い C：やや悪い D：大変悪い

総合評価
A